
魔法少女マルクトマルコ 王国の魔法使いと奪われた未来

明 綾乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女マルクトマルコ 王国の魔法使いと奪われた未来

【Nコード】

N2658L

【作者名】

明 綾乃

【あらすじ】

魔法少女伝奇第二弾、始動！魔法使いジュリア「F」ヘンデルを邪悪な魔術師から救いだした王国の魔法使いマルコ。しかし青銅欄の人々を巻き込むブランクに関わる事件はまだ終わった訳ではなかった：襲い来る盲目の魔術師と圧倒的なブランクの襲来、数週間後に学園祭を控えた日常に迫る非日常の魔手にマルコは…！！

プロローグ：魔法使いの夜

それは、皮肉にも私にとって最も幸せな時間…

青銅欄、生体系を壊さない近未来的な浄水施設によって浄化された
綺麗な海に面した街。

夜の青銅欄もまた、海が月の光を反射する事によって、静かな夜景
を演出していた。

「本当に、この街を選んで良かったわ…そうは思わない？」

海に反射した月に話し掛けたのは

喫茶店、アヴァロンのベランダにてコーヒーを煽る黒いコートの女
性：明〓綾乃。

「ええ解ってる、いずれは貴女もこの街を見下ろして、この夜景を
見ながら…」

明がそう言ったところで、上空を一つの白い影…夜闇を白く切り抜
いたような白い影が通り越していった。

「やれやれ、イレギュラー達の節操無し具合ときたら…マルコちや
ん達も大変ねえ」

明は呆れたように、雲ひとつない夜空を眺めた。

「だけど、これもまた楽しい時間であることには変わりないわね。こんな時間が、永遠に続けばよかったのに……」

明は後悔するように夜空を舞う黄金の光を眺め、腕を伸ばした。

それではお待たせ致しました。

この どうしようもなくどうでもいい ただ一夜の独り言を持ちまして

魔法少女マルクトマルコ、第二期の開始とさせて頂きます、ね

登場人物紹介

実行委員主要メンバー

青銅欄第三小学校に存在する、日直からレクリエーション委員まで何でもこなす

所謂何でも屋的な役割を持った委員。

その内マルコ、ジュリア、蓮はみんなに内緒でブランクを退治している。

晶水 マルコ

>i9696<ruby><rb>518<

【一王国</rb><rp></rp><rt>マルクト</rt><rp></rp></ruby>の魔法少女】 守護聖天使サンダルフォン

使：エリヤ 装備：円環のドラウプニル

青銅欄第三小学校に通う小学三年生。

ブランクに狙われた所で『王国の魔法使い』として覚醒し

魔法と魔術の交錯する非日常に足を踏み入れる事となった。

二年前に通り魔に逢い、瀕死の重傷を負わされたところを明に助けられた過去もあり

それ以来「誰かを助ける力」を欲し、魔法の力を手に入れた後も

ブランクや嘗てのジュリアのような意味を奪われた人々を助ける事にその力を使っている。

ジュリア≡フリードリヒ≡ヘンデル

>i9697<ruby><rb>518<

【一威光</rb><rp></rp><rt>ケテル</rt><rp></rp></ruby>の魔法少女】 守護聖天使メタトロン

エノク 装備：フレイアの翹外套

青銅欄第三小学校に転校してきた白銀色の髪の少女。

その正体は、イギリスの対魔術組織『十字教薔薇十字騎士団』に所属する異端騎士。

生まれつき覚醒が定められた魔法のせい、常に魔法や魔術の絡んだ非日常の世界を歩んできた

しかしそれを覆い尽くすような明るさと人懐っこさを併せ持っている。

婚約者である騎士団統括団長の無明^ニ K^ニ 下院の為に『死を超越^{メトセラレ}する魔法^{ーション}』を研究していたが

前回はその隙について魔術師に洗脳されてしまった為研究は中断。

操られたいた間の償いも兼ねて、現在は名義上『薔薇十字騎士団日本支部？』の保護観察処分を受けている。

青銅欄第三小学校に転校してきてから、エトナという親友が出来た。

神賀戸 蓮（レイライン^ニ エドワード^ニ ウェイト）

【道学派・北欧学派の魔術師】

マルコと同じく実行委員に勤める瓶底メガネの少年。

その正体はジュリアと同じく薔薇十字騎士団から派遣された魔術騎士であり

実は9歳の外見で30年以上の年月を生きている魔術師でもある。

自らが魔術師であるにもかかわらず、邪悪な意思を持つ魔術師に対して尋常ならざる憎しみの念を燃やす。

現在はたった一人薔薇十字騎士団日本支部長と下院に任命されている。

金奈 美香

【エネルギーシユ実行委員長】

マルコ達実行委員の委員長で、青銅欄第三中学一のトラブルメーカー。
1。

トラブルや非日常をこよなく愛する性格で、自分の美学にどこまでも正直な子。

マルコとは昔からの親友で、自分の行動力とマルコとの機転とでお互いを助け合っている。

生粋の日本人であるにも拘らず見事な金髪碧眼で、そのことを原因に周囲から孤立していた過去がある。

葛葉 太一

【青銅欄三小の番長】

実行委員の力仕事&運動担当で、マルコに対し恋心を燃やす少年。

実家は古武術を伝える旧家で、小学三年生の身でありながら中学生さえも屈服させたという武勇伝をもっている。

三年生になるまでは喧嘩を趣味代わりにしていたが、マルコと出会ってからは暴力を辞め愛に生きるようになったらしい。

連をライバル視しており、蓮本人も極度の負けず嫌いであるため常日頃から何かと勝負しお互い拮抗している。

運動はもちろんのこと、マルコの応援があれば普段は苦手とする頭を使った勉強の才能さえ開花する

実質30年も生きて知力体力ともに小学生離れしている蓮でさえも拮抗するというのだからすごい。

しかし、それを凌駕するほど空回りや不幸を頻発する…所謂残念な天才である。

実行委員の関係者

エトナ＝ラヴェイ

> i 1 0 4 8 8 — 5 1 8 <

外国人の両親を持つ赤髪赤目の少女。

しかし出身も育ちも日本は青銅欄の日本人。

同じように外国人風な見た目でも周囲から孤立しない美香や、新しく転校してきたジュリアに深く興味を持ち

ジュリアにとって初めての一般人の友達となる。

校長

青銅欄第三小学校の校長であり、美香の無二の親友。

厳つい外見とは裏腹に包容力が高く、美香に色々と情報を提供してくれる。

実は外見のせいで知られてはいないが純粹に子供が好きで教師をやっている。

(明さんのように歪んだ^{ロリショタコン}『好き』ではなく)

その他の魔法使い、魔術師

明 綾乃

>i111196<ruby><rb>518<

【一反</rb><rp></rp><rt>クリフト</rt><rp></rp></ruby>の魔法使いにして魔術師？】 守護聖天使：??? 装備：????????

マルコ達実行委員メンバーがよく集まる喫茶『アヴァロン』のマスター。

何かと謎の多い女性で、はじめは蓮に一連の事件の犯人ではないかと疑われていた。

正体不明の反魔法を操り、その魔法によって手に入れた王国の魔法をマルコに譲渡した張本人。

重度のロリショタコン…もとい小さくてかわいい子供に目がなく店には殆ど大人の客が来るのを見ない程だそうだ、しかし財政的にはそこそこの問題はないようで

マルコ達が来るたびによくカキ氷やココアを無償で奢っている。明をよく知る者であれば、彼女は怪しいけど善人であるという。

無明 下院

【十字教薔薇十字騎士団総括団長】

ジュリアの婚約者にして、蓮の所属する薔薇十字騎士団の団長。

魔力を媒介に現実を上書きするケイオス学派魔術の使い手で、それ故に無尽蔵の魔力を操る魔法使いに対抗できる魔術師
『アンチウオーロックメイガス対魔法使い魔術師』の二つ名を持っている。
また、魔法使いであるジュリアを婚約という形で魔術的に守護しているのと同時に彼女を愛している。

守護聖天使

魔法使いとなる運命を持った者の願いを受け取って顕現し、魔法使いにふさわしい存在か選定する役割を持った幻想存在

エリヤ（サンダルフォン）

【王国の守護聖天使】

白い子竜の姿をしたマルコの守護聖天使。
マルコのサポートをしてはぬいぐるみとして美香やマルコにぎゅむぎゅむされる過酷？な運命を持った天使。

元は特例的な王国の魔法使いとして明に呼び出されていたのだがその権限を不要に思い、尚且つピンチなマルコを見つけた明によってマルコへと権限を譲渡され今に至る。

隠し事のできないまっすぐかつがさつな性格をしている。

また、あらゆる魔を切り裂く神の剣に変身することができ、その姿は黄金の剣である。

エノク（メタトロン）

【威光の守護聖天使】

黒い子竜の姿をしたジュリアの守護聖天使。

エリヤとは姉妹の関係であり、前世でも前々世でもその関係は変わらないという。

子竜のみならず羽根を生やした猫や人間の姿に変身することができる。

エリヤとは対照的でまっすぐではあるが融通の利かない頑なかつ厳格な性格。(しかしジュリアの前では甘くなるようだ)

なので妹であるエリヤとはあまり仲が良くない。
エリヤと同様神の剣に変身することができ、その姿は銀の儀礼長剣である。

ブランク

この世のあらゆる存在は、神によって意味ルインを与えられることによってその意味を果たそうと自ら魔力を放ち活動している。

魔術師の中で特に異端かつ邪悪なものは手っ取り早く魔力を集める為に

より多くの意味と可能性を持った人間から魔術で意味を奪いブランクに変え、その意味から染み出す魔力を集めている。

また、魔術師の都合のいい手ごまとして新たに意味を与えられ戦闘用に改造されるものもいる。

彼らを元に戻すには、仮初の意味を与え魔術師を倒すか

大出力の魔力をその身に与え意味を自ら再生させることで、最後に魔術師の呪いを断ち切るしかない。

わるもの

グラディ＝マクマートリー

> i 1 1 2 5 4 < r u b y > < r b > 5 1 8 <

【一無限</rb><rp></rp><rt>アイン・ソフ</rt><rp></rp></ruby>の魔術師＝魔法使い

薔薇十字騎士団元团长】

青銅欄のどこかに巢食い、人々から意味を奪い魔力を集めている魔術師…その一人である。

魔術から魔法使いへと昇華することに成功した数少ない例であるにも拘らず

何故彼が魔力を集めるのかは未だ不明であるが、彼がその地位を奪った下院に対して

ゆくゆくはその仲間たちに対して尋常ならざる憎悪を抱いているのは確かである。

さまざまな遺恨とコンプレックスを抱えており一見その目的は曖昧なように見えるが

その実、その望みは己に宿る無限の欲望を満たすことである。

エリアス「レイヴィ

>i10633<ruby><rb>518<

【一無</rb><rp></rp><rt>アイン</rt><rp></rp></ruby>の魔術師「魔法使い 盲目の
武人」

グラディのさらに後ろで暗躍していると思われる魔術師の一人。

盲目で武人めいた雰囲気を持っており、グラディよりは矜持も持ち合わせているが

彼もまた自らの望みのために青銅欄の人々をブランクに変えて魔力を集めている。

最近は魔力集めを同志であるグラディに任せていたが、その敗退を聞き彼もまた前線へと繰り出すこととなる。

彼の望みは、世界に絶望し心を閉ざした主の『世界への復讐』を成就する事である。

?????

アインソウル

【無限光の魔法使い】

エリアスの主である謎の少女。

世界に絶望し、その世界に終焉を齎そうとしている…？

???

????? (本を担ぐ女性)

【明の持つ最凶最悪の武器】

月の裏側にて孤独に存在する、悲しい目をした美しい銀髪の女性。

その手には古びた書物が大事に抱えられており、定期的に明にそれを読ませているらしい。

言動からその悲しみの理由、明との詳しい関係からどこから煙草を仕入れているのかに至るまで

すべてが謎に包まれて入るもの・・・

明のような魔法使いでない以上、彼女が人間ではない何か別次元の存在であることは間違いないだろう。

K e t h e r : 黄昏、日常と非日常

黄昏の赤い光が空中に広がっている。

辺りを見回しても、そのすべてが赤く染まった空一色で…それでも不思議な事に、歩く事が出来た。

「どこだろう、ここ」

少女：晶水・マルコは出口を求めて彷徨っていた。

そこへ、一人の少女の声がマルコを呼び留める。

「あー…とうとう来ちゃったんだ？」 「誰っ…？」

マルコは嬉々として声のした方向へと振り向いた。

この空間は、それほどまでに孤独だったから…しかし

「誰？とは失礼なことをきくね？私の顔…忘れちゃった？」

黒い影が、マルコの瞳を眼前で覗いていた。

「ブ…ブランク…？」

マルコは咄嗟に右手を構えるが…そこに、自分の相棒が一つである神器『円環のドラウプニル』はない。

「言い得て妙っていうのかな？でも、違うともいえる…色とか？」

「色なんだ…」

疑問形しか使わない影に、顔なんてものはついていない。
しかしそのシルエットはマルコにとって記憶の奥底にある『何か』
を髣髴とさせていた。

「そう、私は非日常の存在によって神の定めた意味から外されたもの
言いようによつては、神の定めた意味シナリオからいち早く抜けたイレギュ
ラー…」

ただ、そんな私が存在してもまだ世界は狂わないね？」

「何の・・・こと？」

マルコは頭を抱える。

目の前にいる影が何者かを思い出せない…『脳』は覚えているのに
『魂』はそれを覚えていないのだ。

それに加えてヒントのように加えられる陰の言葉…それはより一
層、マルコに正体不明の違和感を感じさせる。

「まあこれ以上はなしでも今は混乱するだけか…それじゃ、帰って
いいよ？」

影がそう言うと、マルコは黄金色の光に足元から包まれていく…

「わっ…!! まって、キミは一体誰なの!?! おしえてよ!!」

マルコの叫びに、影は応えるようにゆっくりと唇を開いた…

「マールコ!!」「エヒヤい!!?!」

美香の咆哮にびっくりしたマルコは、机から顔を上げた。

そこは放課後の教室、机を集めての『実行委員』会議の途中だったことに気付き、マルコは慌ててよだれを拭いた。

「マルコってば、最近寝起き本当に悪いよ?」

「あはは、ごめん…」

美香は、しょんぼりするマルコの隣に座る銀色の髪の少女のほうを見やり、話を続ける。

「それで、何か良い案はないかなあ文化祭」

「んん、私この国の学園祭にはあんまり詳しくないから…」

ううむと考え込む少女の名はジュリア「F」ヘンデル、以前の戦いでマルコやその仲間たちと激しい戦いを繰り広げながらも魔術師の呪縛を自らの手で断ち切り、救い出された少女である。

彼女が何故実行委員に居るかと言えば、以前の件で起こした問題の責任をできるだけ軽くしようとした彼女の婚約者による計らいであった。

ジュリアの身は同じく実行委員にして薔薇十字騎士団の潜行魔術師、神賀戸・蓮に預けられ

また、魔術や魔法に関する事情は一般世界に秘匿とされなければならないという事情から妖しまれないようにこの学校に転校してきたところを

実行委員の委員長、金奈・美香にスカウトされたという次第である。

実行委員の中でブランクとそれに関する事件に関わるものはこれでマルコ、ジュリア、蓮の三人であり

美香ともう一人、蓮のライバルにして実行委員の体力担当である葛葉・太一の二人にはその事情を隠しているという状態である。

事実、マルコが寝不足である事には美香達に言えないちゃんとした理由があった。

「王国の魔法よ、顕現せし王の奇跡よ、私はここに新たな則を唱える者、新たな理を添える者

故に私は望む…この手に奇跡を、闇を払う魔法を！！

フェオ・ウル・ウイン・アンスール！！」

> i 3 4 5 9 2 — 5 1 8 <

パア…と黄金の光と共に、街の夜空に躍り出る少女の姿はなんと神秘的なものだろうか

否、彼女こそが神秘そのもの…この世に新たな理を結ぶ者、第10魔法王国の魔法使い。

それこそが、非日常の中で変身するマルコの姿だった。

マルコは夜の闇の中でさえはつきりと見える敵の姿を見据え、そこに向かって真っ直ぐに飛んでいく。

闇を切り抜いたように白い、純白の影…意味を奪われたモノのなれの果て、ブランクである。

そしてもう一人…

「威光の魔法よ、降り注げ威光の光よ、私はここに我が神秘を取り出す者、世界の欠片を紡ぐ者

故に私は望む…この手に魔法を、魔を払う奇跡を！！

イング・ラーグ・エオー・テイル！！」

> i 3 4 5 9 3 — 5 1 8 <

純白の威光とともに夜闇に飛び立つもう一人の魔法少女、ジュリアも第一魔法威光の魔法使いである。

そして、二人の魔法少女の変身を満足そうに見つめているもう一人の魔法使いが居た。

夜闇に溶けてしまいそうな黒いコートを羽織り、同色の長い黒髪をストレートに降ろした女性：明「綾乃である。」

「いやーあ…相変わらず二人とも解る事は解ってるというか…やっぱり全裸変身はセオリーよねえ」

「ゼンラヘンシン…?」

首をかしげるジュリアは理解しきれていないようだが、明の言ってる事は変態的なそれである。

明は魔法少女とブランクの位置を見計らって、ジュリアに号令をかける。

「それじゃあ魔法少女、攻撃開始ねえ」

「いつくよお…サーベル、レイン!!!」

カア!!!!と、腕を振り下ろしたジュリアの後ろから後光が射し、その光が実体をもって剣を形作っていく。

やがてジュリアの眼前に無数の剣の群れが形を成すと、それはマルコに向かって飛んでいく。

「わ、ひゃあ!!!」

マルコが思わず剣の群れを回避すると、マルコの眼前を飛んでいくブランクに躊躇なく突き刺さって行く。

『あらあ…人間に戻ったら記憶ごと傷も無くなるだろうけど、あ

の人絶対先端恐怖症になりそうよアレ』

「の、のんきに言ってる場合じゃないよエリヤっ早く元に戻してあげないと…」

半ば呆れたように呟くマルコの黄金の剣 天使メタトロン^{エリヤ}の言葉
葉を遮ってマルコは黄金の腕輪を着けた右手を
針のむしろ…剣のむしろとも言える状態のブランクに向けた。

「円環の門よ開け、奇跡の世界!!」

マルコの唱えた名に応えるように、マルコの腕輪 円環のドラウ
プニル から分身たる輪が放たれてブランクに向けられる。

そして輪の中心を門として、異相の世界から膨大な魔力が光線のようにブランクへと突き刺さった。

「……………!!!!」

ブランクは咆哮を上げて徐々に元の間人としての姿を取り戻していく。

「やった…っ!!!!」

突き刺さっていた剣は全て抜け落ちて、ブランクだった人間は重力に従って落ちて行った。

「修正…」

マルコは落ちて行くその手を取って、地上まで優しく降ろしていった。

そして地上でその手を離したときに、告げる。

「完了！」

Cochma：少女、エトナ＝ラヴェイと初めての友達

秘密と言うのは、誰にでもあるものなのよ。

一千の貌の人間には一千の貌の狂気ほんしつがあつて

それを一千の貌かおの秘密で隠す事によつて、人間は心臓を潰されずにいる…

それは魔法まじきの真実と同じ、知らぬが仏、無知は罪、賛否両論ではあるけれど

でも、秘密それを明かして楽になる事も、偶には大切なことだと思うのよ…ね

ある魔法に依存した魔女メイガスの

証言

マルコが一体目のブランクを修正したその頃、もう一体のブランクをジュリアは飛翔して追跡していた。

燕ツバメのような羽を生やし高速で飛翔するブランクに対して、ジュリアは魔女神フレリアのマントの外套を翼のように広げやがてブランクに肉薄する。

「まてまてまてえ〜!!…おっと!」

ヒュオン!と、身軽な仕草でジュリアは鼻先に迫ったブランクの剣の腕を避ける。

ブランクは悲鳴を上げて力いっぱい飛翔し、ジュリアでも見えないくらいに天高く翔びあがる。

「早すぎてどうしようもないよお…」

やっとのことよろよろとジュリアに追い付いてマルコはに、ジュリアは自信たっぷりに言う。

「まかせて！おつちろー！！」

腕を振り下ろしたジュリアの上空を見て、マルコは啞然とする。

上空には大規模な太極図の魔法陣、その中からマルコ達の記憶に新しいものが落下してくるのである
まるで巨大な鉄槌に衝突したかのように張り憑いているブランクと共に。

コンクリートのような素材できている、平方数十メートル、高さなど総てが魔法陣から出てくるまで解らないような直方体のそれはいつか降り注いだそれに比べてやや小ぶりではあるが、然り巨大なビルのようなものであることには変わらず…

「ちょちょちょちょよ！！…だ、ダメー！！！！」「にやうあ！？」

慌ててマルコはジュリアの肩を掴んで術式を止めさせる。しかし遅かった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！！！

と、その巨体を生成する魔法陣が消失し支えるものを失った巨大ビルは、重力に従い加速しながらマルコ達の上へ落ちて来た。

「わああああああああ！！！！」

悲鳴を上げるマルコ達の前に、黒いコートが翻る。

「『反の魔法の名の下に、その存在を否定する!!!』 『また、消失の反作用による被害も総て否定する!!!』」

ギユ ア ア!!!!!!

世界そのものが悲鳴を上げるような音を立て、作りかけの巨大ビルは青い光となって消滅した。

「ふう、流石にやりすぎねえ?」

空に手をかざしたため息をこぼした明は、彼女達が中空に居るにもかわらず一瞬にしてジュリアの背後に現れる。

「今夜は此処までねえ、あそこで潰れてたブランクはマルコちゃんが修正してくれるかしらねえ?」

「う、うにゃ!?!」

「え!?!は、ハイ…って明さん飛んで!?!」

マルコが良いかけたところで、明の人差し指がその言葉を制止する。

「『ヒトが想像し得る事は、総て起こり得る物理事象』 よん…精進なさい、ね」

「は…はい、ジュリアちゃんはどつするの?」

マルコの次の問いに明は「むーむー!?!」と叫ぼうとするジュリアの口を片手で押さえつつ

妖しい笑みを浮かべ、トランプのカードのように片手に何かを並べ持つ。

それは巷で大流行の魔法少女アニメ『魔法少女カラミティジェーン』のDVDボックス全巻だった。

「ちょっと、世の中の常識と言うものを教えに行くわねえ」

明はそう言うと、シユンと黒い魔法陣の中へと消えて行った。

「…………えーと、とりあえず…………」

一人ぼつねんと取り残されたマルコは、潰れて紙のようにひらひらと舞い落ちるブランクにドラウプニルを向け魔力流を浴びせる。

「修正、完了…………良いのかなあ…………」

次の日、ジュリアは椅子に括りつけられ徹夜でアニメを観賞させられふらついていた。

眠い、余りにも眠い…………眠すぎて今日ある筈の実行委員の会議予定さえ忘れてしまう程だった。

しかし、それも意に介さず、出会いと言う者は突然に訪れた。

「えと…………あのっ私と友達になって欲しいのっ!!」

「にゃあ?」

廊下で出会いがしらにジュリア=F=ヘンデルが、まるで愛の告

白かのように言われたその言葉は

ジュリアの素っ頓狂な鳴き声とともに、告白した赤毛の少女と共に廊下の向こうへと手をひかれ連れ去られていった。

ジュリアの手を引く告白した少女の髪は炎のように紅く、紅く緊張に潤んだ瞳はルビーのように紅く

そしてついやっちゃった的な表情を目に見えて示すその顔は、燃え上がるように赤かった。

「はあ、はあ……」

「…何するの急にい…?」

校舎裏で息を切らす二人、紅い少女は息を切らしながらもじもじとしてジュリアに話す。

「わ、私はエトナ…エトナ…ラヴェイっていうの…その、ジュリアちゃんなら友達になれるかなって思って、会ったら友達になりたいなりたい思ってたなら、つい言っちゃったのです」

ニコパ と微笑み、ジュリアに微笑むエトナに、ジュリアは困ったように頬を掻く。

青銅欄第三小学校3年4組、出席番号5番のエトナ…ラヴェイには友達と呼べるほど親しい人間がない。

その髪の色や目の色が、周りと余りにかげ離れているからだ。

隣のクラスの女の子は、そういう境遇から実行委員と言うコミュニティを経て周りとうまく関わられているらしい。

しかし、彼女の場合は違っていたのだ。
特に苛められているわけでもなければ、違いを指摘された事もあるわけでもない。

ただ違いを指摘される事が怖いのである。

それはコミュニケーションの中に逢って誰もが一度は遭遇する困難であり、彼女の赤い目赤い髪は

彼女のコンプレックスとして、高いハードルとなっていたからだ。

「と云う訳なのです…」

うゆう…と、ジュリアを見つめるエトナ。

「んん…」 - ホントはあんまり一般人と関わるのもご法度なんだけどなあ…」

そう思い悩むジュリアだが、別れ際の下院の言葉を思い出す。

『どうだ、魔術関係者じゃなくとも、この機会に友達をたくさん作ると良い』

それこそ、ジュリアが知らない普通の子供たちの世界を、幸せな世界を知って欲しいから、な?』

「んん~~~~~…いいよ 私がエトナの、初めての友達になっても!」

ジュリアのその言葉に、エトナの頬は更に赤く笑顔は喜びに膨らんでいき

「…ふにゃあ〜!ありがとうございますよ!」「ふにゃあ!?!」

感極まったエトナのタツクルじみた抱擁をもらつジュリアであつた。

「やっぱり演劇じゃない？」

「クラス全員分衣装とか用意するのもなあ」

「じゃあ喫茶店とか」

「待て待てそう言う事ここで言ったりしたら」

> i 1 1 1 9 7 — 5 1 8 <

「ロリメイド喫茶はどうかしらねえ」

「ほらこついう事言う奴が今この場に居るから…」

蓮に突つ込みを貰いながらもむっは~~~~と興奮に息を荒くしている明が、何故実行委員の会議に口をはさめるのかと言えば彼らが今いる此処が明の喫茶アヴァロンだからである。

実行委員はよく会議の場にあヴァロンを利用する、明が無償でかき氷やココアを奢ってくれるからというのもあるが

「にやはは、明さんもメンバーみたいなどこあるし好いじゃないかねい」

「姉御、男子も居るんだけど…」

「無^{もーまんたい}問題ね」

美香や太一も明に何らかの関わりがあるからでもある。

「女装すればいいじゃん」「チエストオ!!!」

明がそう言いかけたところで蓮のハリセンによる鉄槌が降りかかった。

「ああん？ もお、軽いジョークなのにねえ」

「あはは…」

たんこぶを作りため息をつく明を見て、マルコはもう空笑いをあげるしかなかった。

$n = 1 / 2n$) (

P = N P or P N P

Cochma：少女、エトナ＝ラヴェイと初めての友達（後書き）

魔法少女カラミティジエーン：

巷で大人子供を問わず大人気の、熱血ガンアクション魔法少女アニメである。

現代日本を舞台に悪党どもから平和を護る西部保安官の生まれ変わり嘉成かなりジエーンは、戦いを通じて魔法少女としてのみでなく

正義の意味を思い悩み、そして周囲との絆を糧に成長していくという内容。

ちなみに人気すぎて続編発表の情報があちこちでとびかっていると
かないとか…

B i n a h : 会議、美香と実行委員

魔法って、結局何だろう？

世界に新しい法則を作る事、けんり、力：それは一体、誰が決める事なんだろう？

意味や役目が決まっているのなら、私達は何のために生きて、何のために此処にあるんだろう？

考えれば考える程、謎は深まるばかりなので

今はとりあえず、学園祭の行事について考える事にします。

「く普通の王^{マル}

国の魔法使い^{クト}

今日はいつも通りの時間、とても健康的な朝の目覚め。

「マールーコー！！ほら起きてえ、何時も起きてる時間よ！！」

・・・な訳がなく、胸の上でボスンボスン跳ねるエリヤの声でマルコは今日も午前5時に目を覚ます事になった。

「うゝあゝ・・・」

寝起きの悪いマルコはうめき声をあげて起き上がり、その様子を見たエリヤはプツと笑いだす。

「ぷっ…ハハハ、まるでゾンビみたいな起き方しちゃって」

「えゝうゝ…笑わないでよエリヤあ」

エリヤに笑われたマルコは恥ずかしそうに枕で顔を隠した。

晶水マルコはこれといって特徴がない事が特徴の少女であった。秋の初めに魔法少女となってからもその生活は一変する訳がなく、強いて挙げれば本人も望まない形で早起きになったくらいだ。

マルクト

王国の魔法使いであるなら、変身しなくても自然に魔法で代謝をコントロールできる筈なんだけど…マルコって本当に発想は良いのに魔法をいまいち使いこなさきれてないわよねえ？

やっぱり、メイに無理矢理選ばれたからかしら…BYエリヤ

「んん…ふああう…むにゃ」

エリヤが登校中に自動筆記で話しかけてきても、あくびで返すのみである。

眠い時に長文を読むのがつらくなるのは誰でも仕方のない事だろう。しかし坂道を降りるところで気を抜けば転がり落ちてしまう可能性もあるので辛うじて眠気を押し殺している…つもりなのだが残念ながらエリヤからしてみれば全然押し殺せていないのが現状である。

「まーるこ」「ひゃわう」

そんなときに、マルコは背後から美香のタツクルじみた抱擁を受ける。

「どうした？最近は特に寝不足そうじゃないかい、あんまり不健康なのは美香さん頂けないねい？」

「むう、最近朝早くに起こされるんだよう」

二人できゃいきゃい会話しながら歩いていると、後ろからタタタタターとかけてくる足音が聞こえてくる。

マルコが振り向くと、白銀の閃光が火の玉を連れてタツクルしてきた。

「わわわわわ避けてええ!!」「ぶわー!?!」

今日は自分に体当たりをかますのが流行っているのだろうか?そう思いながらマルコは、本日二度目の体当たりをかましてきた張本人であるジュリアに文句を言う。

「もうっ!朝は弱いんだってばあ!」

「にやはは、ごめんごめん…って何その文句?

勢いに乗って走ってたらブレーキ利かなくなっちゃって…ほらっ、だいじょーぶ?エトナ?」

微妙に論点のずれた文句で頭にはてなを浮かべながら、ジュリアは傍らに転げたエトナを抱き起こした。

「あたた…大丈夫なの」

頭を擦りながら立ちあがったエトナの特徴的な赤毛が目に入り、美香は興味深そうに彼女を覗き見る。

「ありゃ、ジュリっちその子…?」「にゃ…っ」

「あ、その腕」

こそつとジュリアの後ろに隠れるエトナの腕にかすり傷ができてい
る事に気付き、マルコ絆創膏を差し出した。

「あ…ありがとうなの…」

「ねえねえ君4組のエトナちゃんだよない？」

「…へへっ、ジュリアと昨日友達になつたにやあ」「…あう」

エトナは美香に話しかけられて尻ごみするが、ジュリアの紹介に合
わせて美香はエトナの手を取りにつこりと笑いかける

「ジュリっちの友達ってこたあ実行委員全員のお友達だぜい！前々
からお近づきになろうと思ってたんだ、よろしくねい！！」

「…あ、よ…よろしくなの！！」

エトナはきつとなんだ、簡単なことじゃないかと胸を撫で下ろす気
持ちだったに違いない。

ずっとどう話しかけていいかわからなかったエトナが希望を持たせ
てくれた張本人であるジュリアに感謝の笑顔を送り
ジュリアも悪戯っぽい笑顔でそれに答えた。

「ねーねーそれで何の話してたの？」

「いやねい、マルコの寝ぼすけをどうにかしようって話をね？」

「いや寝坊はしてないよ！？全くもっ…」

美香に突っ込みをいれながら、マルコもまたジュリアがエトナという友達を連れてきた事に、驚きと安心を覚えていた。

魔術や常識から離れていた世界に生きてきたジュリアも少しづつ普通の幸せを手に入れられるのだから…きっと自分の魔法にも意味があるんだと感ぜられる。

「よーっし教室ついたら早速第6次実行委員会会議開始だー！！」

「ええっ！？エトナは4組なんだけど…」

「いーのいーのばれやしないって！特別ゲストだよ」

女子が三人寄らば姦しいとも言うが、4人ともなれば当然きやいきやいと騒がしい朝となったのははたしてマルコにとって幸か不幸かとりあえずは幸と取って損はない筈だと寝ぼけた頭で無理やり納得したマルコであった。

「さ………て！！4組のエトナも加えたところで本格的に学園祭の出し物を何にするべきか本格的に決めようと思うー！！」

「突っ込みきれんわー！！」「朝から最悪な事に同意見だ」

教室に着くや否や集めた机をバンと叩く美香に太一が鋭い突っ込みを入れ、蓮がそれに機嫌悪そうに同意した。

「早すぎるだろー！！会議するにしたって時間をもうちよっと思えるよー！！あとの前結局最終的に委員長的美香が決めることになって

解散したんじゃないかねえかよ！！てかエトナてそこの子誰！？」

突っ込みきれないと言いつつも的確に指摘する太一に珍しく美香がうぐぐと押される。

「仕方ないじゃないかあ、どのイベントも長所短所あって私には選べなっただよい…」

喫茶店は無難だしどこの期間じゃ準備期間が多すぎるくらいだけど、メイさんが暴走しちゃう恐れがあるから蓮君却下したでしょ？

んで演劇が一番面白そうだから一番推したかったんだけど…足りないんだよねい」

「何が足りないの？」

ジュリアの問いに、美香は指3本をたてて数える。

「シナリオ、衣装、舞台装置とか材料とか」

つまり何もかも足りない、という事実に行委員の皆は落胆する。エトナもまたジュリアに合わせて落ち込んでいる。

「三つ目はどうにかならないの？」

「この美香のアポイントメントの多さを嘗めちゃいかんよ！こんなこともあるつかとあらかじめ連絡は取っておいたんだよい！！でもねい…一番頼りにしてた町工場のおっちゃんが一番最近行方不明だそうで材料のコネが停止しちゃってるんだよねい」

マルコの問いに美香は腕を組んで困ったように唸り声を上げる。

「よしよし…じゃあ衣装はどうしようか…！」

「あの…」

そこでおずおずと手を挙げたのは、ゲストとして呼ばれたエトナだった。

「衣装を用意するだけだったら、私お裁縫得意なの…！」

さすがにこういう場で自分から発言することに慣れていないからか、また顔をその髪と同じくらいに赤く赤面しながら主張するエトナ。

「いいの？4組の行事もあるんでしょ？」

「ううん、うちは喫茶店をやることになっててもう皆の衣装も作り終わっちゃったし

家にいらぬ布がいっぱいあるから丁度いいの」

さらりとんでもない手際の良さを主張したエトナにおおと興奮気味な感嘆の声を上げるジュリアと美香。
最後に手を挙げたのは…

「じゃあ、私シナリオ描くよ？」

マルコだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2658/>

魔法少女マルクトマルコ 王国の魔法使いと奪われた未来

2011年11月21日20時54分発行